



- P16 下田 治輝（4年）
- P18 中 茉莉子（4年）
- P20 澁谷 実央（4年）
- P22 有泉 拓馬（5年）
- P24 嶋倉 穂南（4年）



担当教員
毒性学教室

石塚 真由美

■ ザンビア大学派遣概要

ザンビア大学では、日本では教科書でしか見たことの無い感染症や野生動物など、日本ではなかなか「直接」学ぶことができない、アフリカに特徴的な獣医学を勉強することができます。この派遣授業ではザンビア大学と国立公園において、感染症学と野生動物学を中心にカリキュラムを組んでいます。2019年度は、5名の学生さんが派遣され、2週間、日本と異なる環境と文化の中で、戸惑いながらも楽しく、そして熱心に勉強してきました。また、ザンビア大学の先生や学生さんとも交流を深め、日本ではまず得られないたくさんの経験がすることができたと思います。このザンビアでの経験は、授業でしか決して得ることができない貴重な体験です。学生さんが現地でどのような勉強をしてきたのか、そしてこの経験を通して何を感じたのか、是非、レポートをご覧ください。

ザンビア大学との 学生交流事業プログラム

ザンビア大学獣医学部と北海道大学獣医学部（研究院）は、教育・研究交流について、1991年より部局間協定を結んでいます。その間途切れることなく、これまで多くの教員・学生の交流が続けられてきました。特に、2004年には文部科学省GPプログラム「アジア・アフリカ諸国を視野において：国際獣医学教育推進プログラム」が採択され、2005年より3年間、延べ30名以上の本学学生が、毎年1か月間、ザンビア大学獣医学部に派遣されました。学生らは、現地においてザンビア大学獣医学部教員の指導の下、家

畜の伝染病や野生動物に関する実習などを修学し、日本国内だけでは得られない貴重な経験がすることができました。平成30年度より開始される国際獣医師育成プログラムでは、短期間ではありますが、8-9月ごろにザンビア大学獣医学部に2週間の学生の派遣を行います。事業実施期間中、毎年5名の学部学生（3年生～5年生）の派遣を予定しており、学生らは南部アフリカで課題となっている感染症や、特徴ある生態系における野生動物のマネジメント方法など、日本で学ぶことができない授業を体験・修学します。この事業では、専門科目を英語で学び、現地の教員・学生と交流し、また、学習だけではなくザンビアの文化にも直に触れてもらいま

す。日本とは全く異なる環境のザンビアにおける獣医師の役割とその活動を学び、様々な体験を通して、国際的な視野を持った獣医師を育成することを目的としています。

派遣期間：2019年8月17日～2019年9月4日

ザンビア大学 派遣①

下田 治輝（4年）

私がザンビア派遣に参加しようと思ったのは、アフリカにおいて感染が拡大している感染症について、その現状と日本との違いに興味があったのが大きな理由である。また、サウスアングア国立公園におけるサファリにて日本では経験することのできないアフリカの雄大な自然と野生動物の観察をしたいと思ったためである。

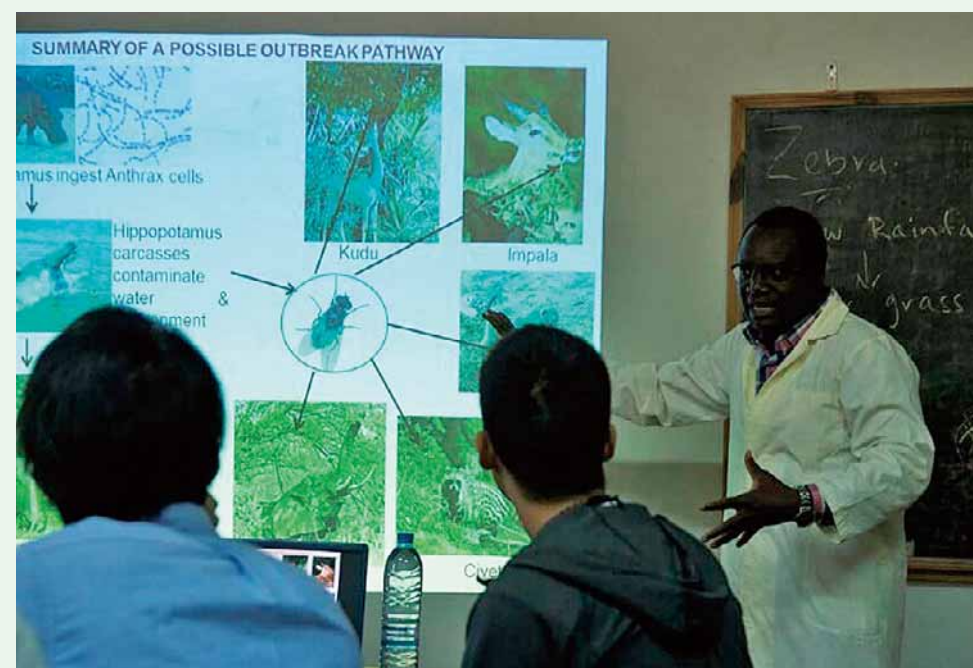
日本から約24時間の移動を経てザンビアに着き、宿の部屋にてまずゴキブリとの出会いがあった。停電によって暗くなった部屋中を縦横無尽に走り回るその姿を見て、自分がアフリカにいるんだという実感を得た。来年以降ザンビア派遣に行こうと考えている人は、多少の不便や虫に囲まれた生活をしなければならぬということは覚えておくべきである。

翌日から続いた講義では、細菌学、寄生虫学、ウイルス学について学んだ。細菌学の講義において印象に残っている話で、ザンビアではたとえ結核の臨床症状が出ている牛であっても、病変が見られなければその肉が流通し得るという話があった。さらに、結核に感染している牛の乳を乳房か

ら直に飲むことで子供が感染する地域もあるという話は非常に驚きであった。また、動物性たんぱく質の摂取不足から、炭疽によって死んだ動物の肉を食べている人々がいるという話もあった。いずれも日本ではありえない話であるが、現地の人々にとっては当たり前の話であり、即座の状況改善は難しいように感じられた。また、日本との違いとして、結核も炭疽も野生動物の感染が問題となっていることがあげられる。野生動物との接触が日本よりも多いザンビアにおいて、家畜と異なり、管理が難しい野生動物からの病気の感染を防ぐことは大きな課題であるといえる。

KafueのSlaughter shelterの見学では、車を走らせること2時間、到着して予想外のハプニングが発生した。なんと口蹄疫の発生により屠畜場が閉鎖されていたのだ。ザンビアの屠畜場を見学できなかったのは少し残念であったが、ザンビアにおいて口蹄疫が蔓延しているという現状を目の当たりにすることができて非常に勉強になったと思う。口蹄疫の感染拡大の原因として、口蹄疫に感染した豚の生肉を家畜の豚の餌として用いてい

たり、農家の人々の間違った知識によって感染豚が管理されていたりすることが話にあった。また、殺処分に関しても財政や政治的理由からザンビアではあまり推進されていないということであった。このような国全体にわたる口蹄疫についての理解の不足ではアウトブレイクの発生を抑えることは困難



細菌学講義風景

であり、これからは教育の徹底やスペシャリストの育成に力を注ぐ必要があると話をしていった。

動物病院の見学では、診療室と手術室の見学をした。1日平均6件ほどの患者が来るそうで、2次診療はあまり無く、1次診療や子犬のワクチン接種、手術などを行っていた。施設自体は北大と比べると充実しているとは言えないものであったが、そのなかでも多くのスタッフが働き、丁寧な診療が行われていた。手術室の見学では、子宮と卵巣の摘出手術の見学をした。手術の見学は初めてであったので詳しいところまではわからなかったが、手術室への土足での出入りが自由であり、衛生的な配慮に関して日本とのギャップを感じる部分があった。しかし、施設自体は無菌的に行われており、迅速に行われていた。手術を見ていて良いなと感じたのは、教員が学生に積極的に挑戦させていた部分であった。学部5～6年生の学生が教員に指示を受けながら本番の手術に参加できるのは非常にスキルのつく良い経験であると思った。機器などが不足する中でどのようにして質の高いサービスを提供できるのかが課題であり、そのためには高い技術力や豊富な知識、薬などの適切な管理が求められていると思った。

サウスアングア国立公園では、サファリでの野生動物の観察とツェツェバエ捕りを行った。サファリは早朝と夕方～夜の2つがあり、それぞれ異なる動物種、行動をしているのを見ることができた。私は自分の好きな動物であるカバを探すことを目標にサファリに臨んだのであったが、出発してすぐに無数のカバに出会い、思う存分に観察することができた。しかし、その後の相次ぐカバとの遭遇により当初出会ったときの感動は少しずつ薄れ、しまいにはスルーされてしまう存在となっていた。たくさんのカバを見ること

ができたのは私にとって非常に幸運なことであったが、もう少し見つかりにくくてもよかったのかもしれない。いずれにせよ、今後国立公園のサファリに行く人は、自分の見たい動物を決めてから参加するとより楽しめると思う。もちろんカバ以外にもライオンやキリン、ゾウ、ハイエナ、イボイノシシなどたくさんの動物と出会うことができ、まるでライオンキングの世界に入り込んだような素晴らしい経験であった。

野生動物の観察と同時に、車のボンネットに設置したツェツェトラップによってツェツェバエを捕まえた。ツェツェトラップとは、ツェツェバエが動き回る青いものに集まりやすいという性質を利用したものであり、青い板に粘着性のあるテープを張り付けた実に画期的なトラップである。実際に刺されたりもしながら、悪戦苦闘の末に数匹のツェツェバエを捕まえることができた。サウスアングアのツェツェバエのトリパノソーマ保持率は数%とそこまで高くないものの、アフリカにおいて深刻な問題である睡眠病の原因である媒介動物を実際に捕まえて観察するという非常に貴重な経験を行うことができた。

最後に、今回の派遣で事前準備から引率までしていただいた石塚先生、下鶴先生、松野先生、現地で授業の調整やハプニング対応をしていただいた中田さん、UNZAの先生方、大変お世話になりました。今回の派遣で得た経験をこれからの自分の人生に役立てていきたいと思います。



カバ サウスアングア国立公園

ザンビア大学 派遣②

中 茉莉子（4年）

2019年8月18日、首都Lusakaの空港に降り立ち、私たちのザンビア大学派遣プログラムが幕を開けました。初めはとにかく不安でいっぱいでしたが、ザンビア大学の先生方は皆暖かく迎えてくださり、ほっとしました。大学で学ぶときのスケジュールは主に、午前中に講義、午後に実習という形で、細菌学、寄生虫学、ウイルス学等を学びました。内容としては北大での授業で聞いたことのある事柄も多かったのですが、それにプラスして、アフリカにおける感染症の実情を学ぶことができたのが大きかったと感じています。例として結核を挙げると、ザンビアにおいて結核のコントロールが難しいのは、放牧されている家畜と野生動物が接触する場所“Interface Area”での相互感染があるからであると学びました。家畜を放牧している場所が、多くの野生動物が暮らすエリアであるということは、私には想像できなかったことでした。また、人への感染経路として、農村部では感染牛の乳頭から子どもが乳を直接飲むことによる感染があることや、と畜検査において、結核疑いで安楽殺された牛であっても、臓器等に病変がなければ低ランクの肉としてそのまま流通



寄生虫の実習での豚の解剖の様子

させることなどを知り、驚きました。さらに、見学を予定していたと畜場Kafue Slaughter Shelterが口蹄疫の影響により閉鎖されていたり、フィールドワークを行う予定だった場所で炭疽が出たりと、日本には存在しない感染症がごく身近にあるものなんだという実感を得ることができたのは貴重な経験でした。日本での講義ではどうしても表面的な理解になってしまうことが多いのですが、現地の状況を知り、それをこれまで学んだ知識と結びつけることで、より深い理解を得ることができたと感じています。

8月31日～9月1日には、Lusakaから飛行機で約1時間のところにあるSouth Luangwa National Parkにて主に野生動物を観察する実習を行いました。ここは私が一番楽しみにしていた場所でした。小さい頃から野生動物の保護に興味があった私は、希少動物の繁殖に携わりたいと考えようになり、日本では動物園でしか見るのできないような動物たちが自然の中で自由に生きているところを一度見てみたいという思いがありました。ここでは早朝と夕方にガイド兼ドライバーの方がgame driveに連れていってくださり、そこでたくさんの野生動物を間近で見ることができました。象の群れが朝焼けの中をゆっくりと静かに歩いている姿に感動し、ハイエナがキリンの死骸を食べているところを見ることができたのも、テレビで見ていた光景そのものがそこにあるという不思議な感覚でした。同時に、本来動物たちがいかに広大な場所で暮らしているのかということを身にし

り、そこでたくさんの野生動物を間近で見ることができました。象の群れが朝焼けの中をゆっくりと静かに歩いている姿に感動し、ハイエナがキリンの死骸を食べているところを見ることができたのも、テレビで見ていた光景そのものがそこにあるという不思議な感覚でした。同時に、本来動物たちがいかに広大な場所で暮らしているのかということを身にし

みて感じ、動物園等の施設ではやはり再現しようとしてもきれいな部分があるのではないかと感じました。私たちが宿泊していたロッジの中でもImpalaやVervet Monkeyなどの動物が悠々と歩いていて、あたかも大自然の中に私たちがお邪魔させてもらっているかのような感覚になりました。野生動物が生き生きと暮らしている様子を見ることができたのは、私には非常に良い経験でした。何より、最近では勉強の忙しさに追われてつい忘れかけていた、このよ

うな野生動物たちを守れる獣医師になりたいと思っていた幼い頃の強い気持ちを思い出すことができました。日本ではなかなか見られないような大自然に浸って、のびのびと生きている動物たちを観察する一私にとっては至福の時間で、つい帰りたくないと思ってしまったほどでした。

日々ザンビア大学の獣医学生や先生たちと接する中で、性格面などにおいて日本人とは異なる点もあり、戸惑うこともありましたが、そのような部分にも徐々に慣れ、プログラムに参加する前よりも小さな物事に動じない強さも身に付けることができたのではないかと感じています。

今後プログラムに参加される方への個人的なア



国立公園にて、夜のライオン

ドバイスとしては、ザンビア大学で行われる講義内容の予習（すなわち北大で学んだ授業内容の復習）をしておくことが重要であると感じました。私自身、講義の前日に頂いたレジュメを基にしておいた復習に助けられた部分が多くありました。また、疑問に思ったことはその場で質問することも大切です（私はこの部分はあまりできていませんでしたが）。しかしそのためには、先生が説明して下さる英語を聞き取り理解する力も求められるので、英語を学んでおくに越したことはないと思います。このように言語や文化などで苦労することはあるかもしれませんが、日本にいただけではできない貴重な経験をすることができるので、絶対に参加する価値はあると思います。

プログラム参加にあたり、Musso先生を始めとするザンビア大学の先生方、ドライバーのElvisさん、引率して下さった石塚先生、松野先生、下鶴先生、中田さん、またEnglish lessonを開講して下さったMike先生、及川さんを始めとする国際連携推進室の方々や教務の方々、そして共に学んだ仲間たちと、非常に多くの方々にお世話になりました。心からお礼申し上げます。



UNZAの学生との交流会にて

ザンビア大学 派遣③

澁谷 実央（4年）

今回の派遣で特に印象に残っているのは、文化交流を兼ねたクイズ大会、FMDの発生、ツェツェバエのサンプリングである。

授業初日に、ザンビア大学獣医学部の5・6年生に来ていただいて、自己紹介とクイズ大会を行った。自己紹介では発言にリアクションして盛り上げてくれたため緊張が少しほぐれたが、その後のクイズ大会の勢いには圧倒された。司会を手伝ってくれたザンビア大学の学生の提案により急遽早押し形式にしたら、自分の方が早かった、（正解発表後答えを変えて）最初から正解していた、と猛烈なアピール合戦となった。想像以上の盛り上がりは嬉しかったものの、ザンビア大学の学生のサポートがなければ收拾がつかなかったと思うと悔しい。間違いは間違いだとはっきり伝えること、自分のペースを見失わないことが意外と大変であると実感した。クイズの後にはたくさん話しかけてもらい、SNSの交換や質問攻めの時間となった。正直なところクイ



クイズ大会の様子

ズ大会で若干怯えていたが、積極性はそのまま、英語のペースを合わせてフレンドリーに話しかけてくれたので、楽しい時を過ごすことができた。残念なことに後日学校ですれ違うこともほとんどなかったが、初日に交流できたことで、その後の心構えができたように思う。

文化の違いもそうだが、感染症に関わる状況も日本とは大きく異なっていた。ザンビアに行くにあたって、日本にはない症例を見たり、ザンビア

での現状を聞いたりすることを楽しみにしていたものの、まさかFMDの発生を目の当たりにするとは思っていなかった。ザンビアについて1週間経つ頃と畜場の見学に行ったが、着いたら妙に静まり返っていた。話を聞くと、今年に入ってからザンビアでFMDが発生し、8月にと畜場がある地域に広まったためと畜場は閉鎖されている、ということだった。冷凍庫を導入し、肉を冷凍できるように



閉鎖されたと畜場

なれば再稼働できるという話だったが、実際に屠畜の様子を見ることは叶わなかった。当日の朝現地に着くまで担当の先生がと畜場の閉鎖を知らなかったことも衝撃的だが、FMDウイルスは低温耐性であると思い出したときにはさらなる衝撃を受けた。と畜場が閉鎖されていると

はいえ近くに牛と豚が共に採食していたし、道路向かいの家では山羊が放し飼いされており、さらに隣国へ通じる道路の交通量が比較的多いことから、FMDを鎮圧するのは難しそうだと感じた。また、と畜場再開まで従業員は仕事がないと聞いて、生活への影響を考えさせられた。

後日ウイルス学の授業でFMD対策の話を伺う機会があったが、摘発淘汰をしたいものの費用がないこと、移動制限しても守られないこと、そもそも対策に獣医師の意見が取り入れられていないこと等、様々な問題点を聞いて、FMDだけでなく、感染症のコントロールの複雑さを痛感した。現在日本はFMD清浄国ではあるものの、豚コレラの発生があり、その他感染症が持ち込まれる可能性が十分にあることから、国や状況が違って決して他人ごとではなく、獣医学的な基礎知識はもちろん、国の情勢や人の意識などにも敏感でなければならぬと改めて思った。

FMDの発生により、本来ツェツェバエをサンプリングする予定の所に行けず、結果としてサウスルワンガ国立公園で野生動物の観察をしながらツェツェバエのサンプリングをすることとなった。と畜場の見学がなくなった代わりに行った動物園で、サウスルワンガで見られる動物の多くを見ることはできたが、同じ動物でも野生下では大きく異なっており、とても興味深く良い経験だった。とはいえ、野生であるため常に動物が見れるわけでもなく、動物がいない間の時間にツェツェバエのサンプリングをしたことは、集中力を保つ



野生動物を見ながらツェツェバエサンプリング

上でも役に立ったと思う。サウスルワンガでは3回ゲームドライブを行ったが、1回目（朝）は車にトラップを仕掛けたものの一匹も捕まらなかった。2回目（夕方）では、車内に入ってくる場合と後ろから追いかけてくる場合が多かったことを受けて、手でトラップを持ち、状況に応じて場所を変えることとなった。時間常もあってかツェツェバエが多くみられ、先生とガイドさんが計数匹捕獲することに成功した。3回目（翌朝）、動物もツェツェバエも見られない時間が続いたが、たまたまビニール袋に入っていくツェツェバエを捕獲し、生きたまま観察することができた。写真でしか見たことのない大きさ、鋭い口器、力強い羽音を直に感じ、睡眠病の脅威が実感に変わった。ツェツェバエを詳しく観察できたこと自体もよい経験だったが、諦めずに調査に臨む重要性を体験できたことも大きな収穫であったと思う。

ザンビアへの派遣を通して、獣医学的な知識が深まると同時に、英語力、基礎的な知識、積極性、自信、対応力など、あらゆる分野が至らないことを痛感し、残りの学生生活の過ごし方、社会に出て目指す方向性をより具体的に考える機会となった。このような機会を与えて頂いたことに深く感謝するとともに、ザンビア大学の皆様、場を用意して下さった方々、引率して下さった先生方、現地であらゆる手助けをして下さった方々をはじめ、お世話になった皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

ザンビア大学 派遣④

有泉 拓馬（5年）

私は感染症の分野に興味があり、ザンビア大学との提携があることが北海道大学獣医学部を受験した動機の一つでしたので留学出発前から小さな夢がかなったかのような気分になり、期待に胸を膨らませていました。ザンビア大学では主に感染症、野生動物、臨床の分野の講義、実習を受けることができ、アフリカという日本とは全く違う環境で楽しみながらもたくさんの貴重な経験をさせていただきました。

ザンビアを含むアフリカの国々では感染症が人と動物の両方において健康を損なう重要な原因となっています。ザンビア大学では細菌学、寄生虫学、ウイルス学についての講義、実習を受けることができアフリカにおける感染症について理解を深めることができました。細菌学の授業では結核、炭疽が取り上げられどちらも現在の日本ではなじみのない感染症ですが、ザンビアでは問題となっていることを学びました。子どもが直接牛の乳を吸うことで牛型結核菌（*Mycobacterium bovis*）に感染してしまうことや、タンパク源不足のために炭疽病で死んだ動物の肉を食べて炭疽菌（*Bacillus anthracis*）に感染してしまう事例があることなど日本の生活では想像もつかないよう

な現状に驚くと同時に衛生環境や食料不足がいかに重要な問題であるのかを改めて実感しました。寄生虫学の授業では実習で市場の寄生虫感染疑いのブタを解剖することができました。おそらく日本の食肉検査場ではめったに見ることがないような*Taenia solium*のシストにまみれた骨格筋や心臓が観察できました。また、Chaminuka Game Reserveではフラッキングによるダニのサンプリング、South Luangwa国立公園ではトラップを用いたツェツェバエのサンプリングとフィールドワークも行い、楽しく貴重な経験ができました。ウイルス学の授業ではウイルス性出血熱と口蹄疫について学びました。特に口蹄疫は実習時にもザンビア国内で発生しており、防疫の観点からプログラムが変更になるなど、その脅威を実感しました。日本のように全頭殺処分、廃棄ができるほど食料にもお金にも余裕はなく口蹄疫汚染地域でも冷凍すれば獣肉を出荷できてしまうことやメディアが誤った予防法を伝えていること、汚染国と陸続きに接していることなど解決の難しい問題が残っています。ワクチンや教科書上の対応があっても経済面や人々の理解など様々な問題があり感染症の問題を解決することの難しさを感じ



（左）ブタから取り出した心臓 （右）ダニのサンプリングの様子



ヒョウ South Luangwa国立公園

しました。

アフリカには多種多様な動物が生息しています。昨今ではOne Healthの観点から動物を含む生態系は人々の健康に大きく影響すると考えられています。アフリカでは、動物の生息域と人の生活圏が接するInterface Areaにおいて野生動物が家畜や人に感染症を媒介することが問題視されています。講義では、野生動物は人がコントロールできるものではないので、農場における防疫や輸出入時の検疫が重要となると教わりました。しかし、検疫所や農場を見学すると周りが広大な自然だったので、鳥や虫、齧歯類などの侵入を防ぐことは日本と比べて難しそうと思いました。また、検疫所では施設の見学と同時に麻酔銃の講義を受けました。野生動物は麻酔前に体重を測ることができないので、適切な麻酔薬の量を決めるには多くの経験が必要だそうです。実際にセーブルアンテロープに麻酔をかけるところを見学すると、想像以上に麻酔は早く効き、また、拮抗薬による覚醒も早かったです。鎮静、処置、覚醒を素早く行い動物への負担を少なくすることが重要であるそうです。South Luangwa国立公園ではゲームドライブをしてたくさんの野生動物を観察

することができ、野生動物の生息域の広さと動物の数の多さを実感し、講義で教わった通り人がコントロールするのは無理であるとよく分かりました。そして、アフリカの多様な自然環境は世界中の人々を惹きつけることもよくわかりました。私もこれまでに何度かアフリカの国立公園を観光しながらも飽きることもないサファリ中毒者の一人なのです。また、はしゃぎすぎて疲労から体調を少し崩したので、慣れない地での油断は危険だと教訓を得ました。

ザンビア大学での講義の他にJICAやKAMPAI project、人獣共通感染症リサーチセンターでの活動についてのお話も伺うことができ貴重な経験となりました。日本の外に出て違う国や違う分野の人と協力しながら研究、活動していくことに魅力を感じ、私も獣医学の領域における得意な点を活かしながらも広い知見を持って活動できる人になりたいと思いました。

最後になりましたが、貴重な留学の機会を与えていただいたIVEP、北海道大学、ザンビア大学の先生方をはじめ、支援して下さった様々の方々に感謝いたします。この留学での経験を活かし、より一層精進を重ねます。

ザンビア大学 派遣⑤

嶋倉 穂南（4年）

ザンビア研修の間、私は日本とザンビアの違いについて強く感じる場面が多々あった。

例えば、微生物学の講義では、ザンビアには野生動物と家畜の生息域の重なる地域があり、これがウシ型結核などの病原体が伝播する原因となっていると学んだ。また、ウシ型結核は人獣共通感染症であり、人も感染する危険性があるが、地方部では子供が牛から直接牛乳を飲んでいたり、検査で病変が見られなかった牛は感染疑いがあってもダウングレードして市場に出回ることもある。このような牛肉が市場に出回る原因には、動物性たんぱく質が希少であるというザンビアの現状も関連している。さらに、今年は降水量が少なかったため、動物での炭疽の発生が多く、炭疽で死んだ動物を人が食べることによって起きた感染例もあった。

ウイルス学の講義ではアフリカ豚コレラ（ASF）や口蹄疫（FMD）などのアフリカに特徴的な感染症について教えていただいた。ASFはザンビア東部で蔓延しているが、国内での感染拡大にはこれらの地域よりも隣接する国から病原体が持ち込まれることが多い。また、ザンビア南部にある国立公園のイノシシが移動することにより感染を拡大させると危険視されている。一方FMDは北部および南部の一部地域で蔓延している。今年はルサカ周辺でも大規模な流行が発生しており、プログラム期間中、頻繁にFMDについて耳にした。日本では対策として陽性牛を徹底的に淘汰するスタンピングアウトという方式がとられるが、この方法には農家への補償金など、多額の資金が必要になる。その

ため、財政が逼迫しているザンビアではワクチン接種が主な対策として取られている。

このようにザンビアでは流行している感染症や自然環境、地理的条件が日本と大きく異なる。また、経済状況や人の生活様式も違う。2週間ザンビアに滞在してみてほぼ毎日計画停電を経験するなど、首都で都市化が進んでいるルサカでも物資が足りていないと感じることが多々あった。このような違いから、感染症対策として日本では当たり前のように行われていることでもザンビアでは通用するとは限らないと学んだ。

また、寄生虫学の実習では有鉤条虫（*Taenia solium*）に感染した豚の解剖を行った。有鉤条虫の成虫はヒトの小腸内に寄生しており、糞便中に虫卵を排出する。その虫卵を豚が摂取すると筋肉中にシストを形成する。解剖した豚には心筋や上腕三頭筋、頬筋など活動量が多く血液供給量が豊富な筋肉に特に多くのシストが観察された。また、寄生によって豚は衰弱しており、体表にシラミが付着していた。有鉤条虫など寄生虫については日本の授業でも学んだことはあるが、実際に目にすることはめったになく、動物に寄生している姿はザンビアに来たからこそみられるものだった。



豚の解剖

さらに、野生動物についてもアフリカならではの経験をした。サウスルワンガ国立公園ではアフリカゾウやキリン、カバ、イボイノシシ、バツファローなど多くの動物を目にした。観察しているうちに今まで自分が知らなかった種類や特徴的な行動をとる動物がいて、獣医学だけでなく動物の種類や生態についてもより深く学びたいと思った。また、アフリカ睡眠病の原因となるトリパノソーマ原虫を媒介することで有名なツェツェバエも生きて飛んでいる姿を見ることができた。原虫を保有するツェツェバエは10%程度で、刺されて必ずしも発症するわけではないと聞いたが、動いている車の中に飛び込んでくる姿を見るとやはり不安は拭えなかった。このようにアフリカで問題となる虫を身近に感じられたのもプログラムに参加したからこそである。

ここに記したものは今回のプログラムの中で特に印象に残ったものだが、講義や実習、フィールドワークを通し、ザンビアの感染症や獣医療、野生動物についてほかにも多くのことを学んだ。その中には日本とは全く状況が異なるため理解するのが難しかったり、あるいは英語の聞き取りが困難で話が分かりにくい時もあった。しかし、そのような時に役に立ったのは日本の授業で学習した獣医学の知識だった。このプログラムを通し日頃の勉強の重要性を再確認し、これまで以上に真剣に取り組みたいと思う。また、自分から積極的に質問をする姿勢も大切だと感じた。私はプログラム中、できるだけ質問をしようと試みたが、自分で尋ねたことは記憶に残りやすいし、先生から追加で新たな話を聞くことができたので更に興味が高まった。

私は今回アフリカに行くのが初めてだったので渡航前は不安でいっぱいだった。そしてプログラム



国立公園で捕獲したツェツェバエ

開始直前には乗り継ぎの香港空港でのデモや台風の接近があり、無事にザンビアへ行けるのか心配していた。しかし、滞在中は大きなトラブルに巻き込まれることなく、また、自分が想像していたよりも快適に過ごすことができた。これも引率の先生方や中田さん、国際連携室の皆様など多くの方にサポートしていただいたおかげです。また、ザンビアの先生方やドライバーのエルビスさん、そのほか現地で出会った人々は皆私たちに対してとても親切にしてくださり、とても充実した研修を経験することができました。このような貴重な機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。最後になりますが、今回のプログラムに際してお世話になったすべての方に感謝申し上げます。



UNZAの正面玄関にて